

先ず参考にすべきはこんな時南北鐘樓にどの位人が集るかである。大變な混雜だけでは判らない。南鐘樓へ行つて見たが、一列になつて焼けた虎の門の北方から東に、大迂回をして鐘樓迄、一〇・四五の人数約250人、引導鐘の方はこれも同様一列になつてぐる／＼回り約300人、兩方併せて550—600人といふ有様、而も後から／＼という風に續いて増すばかり。北鐘樓の方がどうしても人数が多いせいか、立札に「御回向は南引導鐘でも出來ますからおいでください」として、矢で方向を示してあつた。尙お此鐘樓の附近には「四天王寺經木認め所、一枚二十錢」(町では三十錢)とした札も隨所に立ててあつた。餘興の藝能大會場も矢を以て示し、五重塔前に於いてとして、同様立札があつた。

晝食後博塔壇上に腰を下ろし、群衆の批評を他所ながら聽いてみた。其うちの二つ二つをかいてみると、

吊鐘の形を造つたのはいゝが、これは供出したのより少し小さい様だ。何故こんなものを造つたのか。堂でも建てればいゝのに。

(建てかけの博塔を指して、私に向い)「これは何ですか」。「これはあとで何かになるのですか」と、勿論小生を單に普通の參詣人と思つて質問をした人があつた。

塔と思う人はなく、大概は吊鐘に象つたと思つている。

等である。塔身の西側の方に龜裂が入つた。基礎工事が不完全であつたせいだ。夫を大ならざらしむるため、帯以下半徑を一尺増して周圍に瓦を積み、又龜裂にはセメント・モルタルを注入して補強する事にした。そして帶上端と基礎上端には水垂勾配を附し、セメントにて塗立て、雨水が侵透しない様にする事等を協議した。

大阪に「輿論新聞」というのが近頃發行されている事は知らなかつたが、先日そこから京都の拙宅へ人が来て、何か隨筆を書く様に依頼して行つた。丁度午後ひまができたから、25日午前中に四天王寺へ取りに行くなら今日書くが、どうするか電話できいたら、行くといふ返事だから書いた。一五・三〇から一六・四五迄、丁度1時間15分かかつた。

塔址で知人X氏に出あつた。全く偶然のこと、久々でいろ／＼の話がでたが、そのうちに次の様なのがあつた。X氏は大阪市の住人で罹災者の一人。好學の士であつた。曰く「罹災の時藏書を手當り次第十冊ばかり持出して豫生活をしたが、其間に折角持出した書物を盗まれた。其盗まれた書物のうち『成蟲樓隨筆』があつた。いろ／＼書入をしておいたのに惜しい事をしたが、何とも仕方がなかつたのであ



らめた。所が其後暫くたってから松阪屋で古書即賣會があつたので行つてみたら自分が據生活中盗まれた隨筆が出ていた。そこで自分は書店の主人に其書物のいきさつを話し、書き入れを證據に是非再び自分の所有に致し度いから、價の高下を問はず賣つて貰い度いといつたら、其主人も随分變つた人に見える。「夫なら差上ります」といつて無代價で譲るとの事であつた。主人の厚意は感謝に耐えなかつたが、無代は自分の氣がすまないもので、代金は差出しはしたが、なごやかな氣分で再び自分の手に戻つた。珍しい事もあるものだ」と。そういう事は無論あり得る筈である。が併しめつたにあるまい。尙お又さんは其昔亡弟貴彦が六高教授時代に生徒であつたそうで、(筆者註、これは全く初耳であつた) 貴彦が俳句をやつたり謡曲をやつたり、そういう方面に興味をもつていたので、俊一も今はすまして居るが若い時はやはり中々隅へおけなかつたのだらう、と思つていたと言われたのに對し、元來俊一は長男で、兄妹は6人あつたが、長女と貴彦と末弟と3人には、父の性質が遺傳したらしく、俊一と二女と三女の3人には、そういう方面は全然傳わらなかつたと説明したので、漸く納得ができたようであつた。此日もまた、世の中は廣い様で狭いものだと、つくづく感じた次第であつた。

9月25日。

水曜日・雨・四天王寺發・法隆寺行・泊。

此朝引導鐘の所は雨天のせいか甚だ淋しく、漸く20人位集つていただけ。尤も前夜から豪

雨で、五・〇〇頃から稍小降となつた。博塔は昨夜のうちに確に崩壊したろうと思つたのに、不思議な事になつていた。一〇・〇〇正確に輿論新聞社からN君が原稿をとりに来た。題は「本能」(文化欄に載せるといつたのに、後に送つて来た新聞紙を見たら、「けふの」)としておいた。一一・〇〇晝食代りの辨當。一二・三〇湊町發奈良行の列車にて法隆寺へ行く。一三・五〇法隆寺驛着、幸に大阪にては寺から湊町迄雨は降らなかつたが、法隆寺驛から寺迄は降られた。そうして遂に陰鬱なる雨天となつた。

### 博塔塔身龜裂を生ず。

昭和21年10月4日、寺からM君の名で速達便がついた。夫によると「博塔塔身の龜裂は其後益々大となり、危険につき何とかしなければならぬから、至急一度來寺を待つ、若し日を決定しかねるなら、だしぬけでも差支ない」との事、M君はY師の代理であつたから、こゝによつたらY師は急用で他行され不在になるのでとつた處置と心得、直にM君宛に返事をかいた。つまり龜裂が大きくなって危険になつたのなら、崩れない先に崩して根本からやり



直すべきである。中間設計として相當の年月存置するつもりなら、其間に自然崩壊でもしよ  
うものなら、夫こそ大事となるから、此際思い切つて積み直すべきである。手のつけ様のな  
くなつたものを、私が行つてみても仕方がない。先日の拙案を施工する餘地がないのか、何  
故に早速着手しなかつたのか。とにかく當方にも豫定があつて行けないから、やはり豫定通  
り12日に行く。崩れる様な塔を積み出した責任はど迄も負う。とにかく別の材料を以て磚  
塔の如き外觀をもつ様な塔を建設すべき案をもつて行く。という様な返事であつた。控をと  
つて置かなかつたので、しつかり今記憶してはいるが、大體こつた意味であつた。

金剛組の〇君はどうも多忙のせい、少しもみてくれなかつた様だし、伊達の「駒やん」  
が主任で組立たのだ。俊一も時々行つてはみたが、構造迄は干渉せず、餘り任せすぎて、今  
度はどうやら一世一代の失敗をやつたらしい。

10月12日。

土曜日・朝雨・午後晴。四天王寺行・泊。

前日は淨安會の見學で奈良へ行つた。京都でも降つてはいたが大した事はなさそうに思わ

れたので、天氣になる見込で出かけたところ、午後から大雨となり、會終了後大阪に出で、  
夜はX宗匠邸に宿泊の光榮に浴したが、其夜の土砂降りは大したもの、埴塔なんか忽ち無  
惨の最後をとけたらうと思われた位。朝になって雲切れがしだしたから、或は何とかなるか  
も知れないと思われた。九・三〇頃から夫でも薄日が出て、大概見當がついたのでX邸發、  
一〇・三〇四天王寺着。通りがけに埴塔を見たところ、龜裂は正に東西南北の方向に入り、  
伏鉢を象限づゝに四分した形にしてつていた。

四天王を刻した石が四方に入れてある。其石の一方の側に沿い、西側のが最も幅廣くて約  
3寸、以下北・東・南の順序で、南側のが最も狭く、夫でも約1寸の幅さがあつた。Y師に  
も金剛組責任者に面會、本日一六・〇〇より會議を開き善後の處置を講ずる由。M君も外出  
中であつたが間もなく歸來。いずれ會議の席上で詳細述べるが、木材を以て埴にかえたらと  
いつておいた。

午後「請花」がどの様に製作されつゝあるかを視察した。小林老木工頗る頭がよく、思  
通りに造りつゝあつたが、花瓣の裏に當る所の取扱は、私のいう事が呑み込めないらしく、  
どうも少し變な事をしていた。だから其邊を十分説明し、圓味をもつ様に膨ませるのだとい



つたら、どうやら大體判つたらしく思われた。次回行く迄に二瓣だけ完成させておく約束が成立した。

會議は一六・〇〇になつても一六・三〇になつても始まらなかつた。そのうち一七・〇〇になり夕食が出た。一七・一五に夕食を始めたら〇君が出現して今から始めるといふ。さんぐ待って今夕食を始めたばかりだから食事がすむ迄待つて貰い度いといつたが、どうも餘り時間に就いて文句をいうのも多少氣のどくになり、交渉の結果はやはり私の食後にといふ事になつた。茶室でD・S・T・Yの四師と私とで一七・二〇から始めた。そうして僅に15分間で終つた。會議とはいふものゝ、實は拙案を述べたに止る。寺の幹部は何れ相談しておきます、というので終つたのであつた。此席上私の述べた案とは大體次のようなものである。

磚塔を造り、本設計の木造層塔の建設に着手する迄、10年乃至20年位間があるとすれば、相當に耐久性に富んでいなければならぬ。今折角積んで平頭迄できたのを壊すのは惜しいが、姑息な事をして置いて後に自然崩壊でもしたら大變だから、一層思い切つて崩して了い、基礎工事から始め、下方三段の基礎のみ磚を用いてつくり、其上端には適當の水垂勾配を附し、セメントを以て塗たて、或は磚を敷き目地はセメント塗仕上げとし、水分の侵潤しない様にし、伏鉢以上新に木材を以て磚を模して造り、其

部を黑色、目地は白色塗仕上げとする事。四天王の種子を刻した石は、圖面の通りに上下の石——土臺屋根とに相當する——を出してセメントを以て堅固に取つけて積込む事。又心柱も現在のまゝでは細きに失する虞があるから、此際此も太いものに取替え、周圍の構架と離して支柱も増し、萬全を期して、たとえ多少費用を要するとも、斷然造り直す事。以上。

というのである。夜M君來訪。二一・三〇就眠。

10月13日。

日曜日・朝好晴・後下り阪・四天王寺發・法隆寺行・泊。

朝早く例により境内を歩く。好晴故心地よく一巡して歸室すべく本坊の南門を入ろうとした時、眼の前に小鳥一羽、負傷したものの如く地上に落下した。同時に附近の悪童らしいのが二三人其鳥を捕うべく現われ、小鳥は羽撃きして逃げようとしたが、飛べないので遂に捕えられた。其時物のかけからこれもろくでなしらしい青年一名、空氣銃を手にしたのがやって来て、射撃術の巧妙な事を悪童子群に誇るものゝ如く、頗る得意であつた。私は此小鳥が何であるか、益鳥か夫とも害鳥であるか、名も何も知らないが、苟も寺の境内で而も本坊の門内で、この亂暴狼籍は何たる事か、餘りひどすぎるではないか。たとえ手に負えない害鳥



であるにしても、何もこんなところで打たなくてもよかろうと、歳甲斐もない青年を憎む心と、小鳥を憐む心とで、折角いゝ気分が全然害われてしまった。寺としても、夫が守られるか否かは別問題にして、境内にて空銃を使用すべからず位の掲示を出しておいたらばどん小鳥・栗鼠・兎等皆苦しめたり、たぶらたりしたものば起訴せられたし。

SOUTH PARK  
COMMISSIONERS  
ANY PERSON MOLESTING  
THE BIRDS, SQUIRRELS  
OR RABBITS WILL BE  
PROSECUTED

ANY ONE MOLESTING  
BIRDS OR THEIR NESTS  
SUBJECTS TO FINE  
OF \$500 TO \$200.00

又鳥糞等をたばらするを莫大の罰金と科せられるといふ高札

九・三〇から一一・三〇迄、高女講堂に於いて奈良時代の建築に就いて講演。其爲め朝辨當をもってつい眼と鼻の間の高女へ出かけ、こゝで辨當をすまして一四・〇〇湊町驛から名

園に、次の様な高札があったのを見た事がある。方々にでゝいるが、寫してきたのはこれだけだから、これを出しておく。寺で罰金をとったりする事はできまいが、こんなのを早速真似の必要があろう。神社ではずっと以前から掲示してあるのに、寺ではなぜやらないのか。

古屋行列車にのり法隆寺に向った。大變な人で、既に湊町驛で座席のない人が可なりあった位。一五・〇〇法隆寺驛着、一五・三〇寺着。法隆寺邊は時々雨が降ったとの事。此日は貫主親下は信貴山へ行かれたそうで、留守であった。夕刻歸寺。夜になって雑談中、今日は歩いて行ったが、歸りは汽車にしたと。どの位ありますかとときいたら、先ず一里との答。一里歩いてケーブル・カーへ乗り、終點から七八町で寺へつくそうであるが、少くとも往復15町と36町とで合せて50町と、寺と驛との間を加えて近い二里。夫れだけ歩いて少しのつかれも見えず、親下の健康状態最も良好、何よりめでたい事である。どうも十歳ばかりの差のある私は、とても此まねはできない。歳の差は十でも健康の差は三十か四十位であろう。つい此間も祇園から清水迄、清水寺から法觀寺へ出て五重塔へ登り、京阪五條停留場へ出ただけで、翌日は腰が痛くて困った。まことにお耻しい次第である。(昭和21年10月25日稿了)

11月11日。月曜日・晴・四天王寺往復。



11月は都合により、やはり少し早く行くべく用意をし、10月31日葉書を認めてM君あてに出した。其歸りに法隆寺へよるべく同時に發信した。つまり11・12が四天王寺、13・14が法隆寺と15日に京都歸着のつもり。何ほ何でも戦争はすんだし、郵便料も一躍三倍の15銭になったし、いくらゆっくりしても京阪間10日あれば十分到着の見込は確實だと思つたからである。ところがあきれた事には、どこをどう彷徨つていたのか、着していなかった。

尤も速達郵便が東京・京都間5日を費した實例があつた。下谷局21・9・17消印、西陣局21・9・21消印で配達された。餘りひどいので切抜いてしまつておいたから、いつでも證據を提出できる。今年春3月25日、和歌山有田郡の某所へ書留小包郵便を出したら、いつ迄たつても配達されないし、郵便局へ取調を依頼しても埒があかず、あきらめていたら5月初旬に着いたといふ知らせがあつた。四十日以上かゝつていた。もう一つ東京都吉祥寺局から出した書留小包は重量750gとあり、七條局では「到着重量七五〇瓦」といふ札がつけてあつたが、西陣局に來た時は550gとなつてしまつた。つまり内容は何か知らないが200g盗まれたので、配達してくれず、印判持參出頭せよという通知が來た。日本の郵便は此頃は斯様に信用ができないのだから、葉書が不配位仕方がないのかも知れないが、夫にしても10日たつても

未だついでいなかつた（此葉書は11月12日の消印で11月13日到着の由）ため、折あしく寺務局に責任者は誰も居ず、偶ま自坊に居られた方も外出されたそうで、取付く島もなく、折角出かけて行つたのに、何にも用は足りず、いや氣がさして直に引返して了つた。

11月13日には京都から法隆寺へ行つたところ、法隆寺へも葉書は着いていなかった。だから災難とあきらめるべきかも知れない。至極小型の薄っぺらな葉書だから、郵便箱のどこかへ引掛つていたのかも知れない。併し四天王寺の當局、責任者全部留守はひどい。以後何とか御繰合せの上、少なくともお一人はいてくださらないと、行つたものは困る。使用人に話をして、誰かさがす様に頼んでも、まことに不愛想、きではなを括つた様な挨拶で、話をしていても、のれんに腕押しで、全然相手にされない有様であつた。何かきいても頼んでも、まるでそつぽを向いて如何にも面倒臭いといった風な返事を三度に一度位するのだからひどい。

法隆寺への葉書、即ち10月31日に四天王寺へと同時に出した分、11月20日漸く着した由の御通知を戴いた。着いたからいゝ様なものゝ、此頃は消印が一つだし、こう遅くなつては、まるで書いて出すのを忘れていて、失敗したのであわてゝ投函した様でまことに工合がよくない。何とかうそでない證據はないかしらん。書留でも間に合うかどうか判らないし、速達でも駄目とすると、何とも早や困つたものである。

（此一項昭和21年11月25日 追記）



昭和21年12月18日午後、四天王寺から歸つて来た夜は別段異常がなかったが、翌19日朝から突然眩暈に悩まされ、立って歩くどころではなく、床の上に起き上る事も勿論、寝返りさえ不自由になってしまった。どうもたゞではすみそうもないので、早速醫師の來診を乞うたところ、いろいろ検査の結果、動脈硬化が相當に進んでいるとの事で、其方の手當をなし、其間來診4度で血壓は240—210と變化し、最初にまるでなかった食欲も少しはで、來て、22年1月1日の朝は辛うじて家族と共に雑煮を祝う迄になれたが、やはりねたり起きたり、1月21日初めて漸く外出、醫師宅に出かけて診察を乞い、大阪迄行つても差支なきや否や尋ねたところ、最早差支はなし、又食養生の必要もなしとの事に、四天王寺宛に醫師の許可を得た。故1月29日發31日歸宅の豫定の速達便を出しておいた。2月1日にはゼネラルストライクを決定する、そうすると交通機關は勿論、其他何も彼も全部停滯するそう、此頃の新聞紙上随分やかましいから、若しそうになると、四天王寺も法隆寺も随分御無沙汰になる。そうすると甚だ申譯のない次第故、せめて四天王寺だけ、たとえ用事がなくともすましておき、幸にストライクが無事解決し汽車の切符が買えたら13日に法隆寺迄大阪から直接に行つておけば、夫からあとは何とかなるであらうという見當をつけたのであった。

右の様な次第で、21年12月中旬から22年1月中旬に亘り殆んど30日間臥床といった状態に暮した。これは倏一にとつては可なりの大事件で、物心がついてから先ず初めての出来事であった。但しベッドがたゞのベッドで終り、デス・ベッドにならなかつたのは幸い此上もなかった。

然るに四天王寺からは、今何も用事がないから當分来ないでもよろしい、十分養生をして恢復してからにした方がよからうという速達便があつたし、殆んど同時に法隆寺修理事務所からも2月に入つての方がよからうという通信があつたので、當分延期の事にきめ、月末の旅行は見合せる事にした。

次はいつにしたらばよからうかと考えていた際、1月31日N君、2月11日紀元節にU君來訪の結果、2月中にとにかくも四天王寺をすます方都合な事が明らかになつたので、法隆寺は昨年11月以降御無沙汰になつているから、一緒に參詣する事にして兩寺へ其旨申出た。ところが殆んどこちらの申出たと入れ違いに、法隆寺のA君から2月22日のお太子さんの日に、聖靈院の立柱式をするから來てはどうだという勧誘状があり、四・五日過ぎてから佐伯



狛下からもそいふ意味の通信を載いた。これより先き四天王寺へは、2月20・21日に行き、21日午後法隆寺へ行けば翌22日に丁度間に合うから其様にこちらだけ確定しておいた。然るところ16日になって四天王寺M君から18日に行くという速達郵便が来た。約の如く18日にM君來訪、目下工事関係者のY師もD師も旅行中で、月末でなくては歸寺されぬ故、來ても無駄だと聞かされた。寺からの手紙にそいふ意味の事が書いてあればすぐに判るのに、いくらこちらは醫師の許可を受けたから行くと言って出しても、先方から無理をして萬一身體にさわるといけないから、十分養生をしろという工合に、返事が婉曲過たから、鈍漢には全然不通であつたが、こう直接法の方がどの位いゝか判らない。とにかく四天王寺は更に3月13・14日の焼失記念日なる第三回忌迄延期し、來る21日京都から直接に法隆寺へ參詣し、翌21日聖靈院修理立柱式參列者の末席を汚す光榮を有し得る事に決めた。

昭和22年2月21日は、數日來の好晴の引續きか、やはり非常な好天氣でたゞ風が可なり吹いて寒かつた。三條から九・〇五の急行で油阪下車、奈良驛へ行つたら湊町行は一四・一〇しかない。而も切符は制限發賣をしていた。其割合次の如く、買ひそくなつたら夫れつきりといつた有様。窓口の上に表(次頁)が出してあり、其表の右端に乗車券の發賣數が書いて

列車番號	行先	發車時刻	發賣枚數
343	湊町	6.54	20
205	ク	7.19	30
345	ク	7.44	35
303	ク	10.37	40
305	ク	14.10	35
103	ク	15.40	55
105	ク	17.35	35
307	ク	19.44	20

あるし、人數を勘定してみれば直に其汽車へ乗れるかどうか判るといふ寸法。私が驛へついたので凡そ10時35分で發車迄約1<sup>3</sup>/<sub>2</sub>時間あるから、寒い驛の腰掛で休んで冷え切つた團飯を一滴の飲み物もなくともかくもたべて待った。其代り切符は三番目に買って、座席はなかつたが樂にのつた。無賃乗車券を持たないものは、こんな時まことになさけない思いをしなければならぬ。

京都でも電力不足とあって、つい先日迄隔日晝間停電であつたのが、四日目に一日だけ晝間送電がある事になり、

夫も一度もなく、いつの間にか夜だけになつた様で、皆なぶつ／＼いつていたが、法隆寺あたりはとてもお話にならず、ついたと思つたら消える程度、何もできない。京都の方がどの位いいか判らない。めつたに不平等いうものではない。

昭和22年2月22日一一・二〇から一時間に亘り、聖靈院立柱式が舉行された。昨日の通りの好晴で其上幸に無風。午後夢殿及東院廻廊修理工事報告書(第九)寄贈あり、紀念日に絶好



の記念品ができた。

昭和22年2月23日は午後法輪寺塔婆の焼址を見に行く、A君同行。歸途現中宮寺東方畑中に残れる同寺遺址(富郷村大字幸前の西方なる宇舊殿を主とせる一町七段三畝九歩の地)を視察、午後中宮寺へ參詣。同寺庭内に遺存せる礎石及び傳法堂西北方輪藏址の礎を見た。この中宮寺址よりの礎石及び同寺址は、2月26日奈良市公會堂にて開催の史蹟調査會に議題として提出される豫定であるため、一通り視察して記憶を新にしたのである。A君何れも同行された。

此は實地視察してみると、我乍らよく氣がついたと思う。此前みたのはいつであつたかすつかり忘れていた。畑中に残れる分は勿論、現中宮寺庭前、新しいとび石の間に交つて散布せる分共、よくもかく完全に記憶から脱去してしまつたものだ。おかげで反對に完全に思い出す事ができた上、自信を以て會議の席に列する事ができる。

今夜もう一泊、翌24日京都歸着。歸りはとても不便になり、法隆寺から京都直通は夕方一度しかなく、而も10時何分かに法隆寺發の汽車は、龜山方面行のでヤミ屋で一ぱいでぶら下るより仕方がないそうだ。そんな事をきかされたので切符は昨23日買つておいて貰い、此朝第一列車で奈良行、東向迄歩いて三條行へのり、無事歸宅し得たのであった。







後記

以上記した様に、昭和21年12月31日には自宅で病臥していたため、豫ての希望通り此年の最後の日の、四天王寺址の有様の一部を寫真にとれなかった。従って復興記も寫真もうまく年内でおさまらず、中途半端になったが、夫は止むを得ないとして、たとえ半端でも何でも一應締括を得たのは好都合であった。實は引導鐘を吊る北鐘樓の設計圖も掲げたく思ったが、間に合わないで見合せ、ここに先年是非と言われて大急立案した太子殿の平面圖だけを掲げておく(五二)。此平面圖は無論寺へ相談しても駄目だから俊一の私案に過ぎない。夫れ故將來幾多の修正を要する次第なのはいう迄もない。故に未定案も、夫は實に大々の未定案だけでも、【續隨筆】一〇五の右下に示した圖の通り、寺側の意見と希望とを尊重したもので、先ず大體こんなものゝつもりといふ所を、少しく詳細に示したのである。これが愈よ決定してものになりだすのは、夫は實にいつの事か判らない。



四天王寺の焼失と復興

尙お昨年中に先ず完成した工事に就いて、其月日の判明しているものを、後日の参考に供するため書き上げておく。これは手許では不明であったため、金剛組へ照會して得た結果である。

一	納骨堂建設着手	3月10日
一	同 完成	8月10日
		5ヶ月
一	塙塔假屋根建設	6月17日
一	聖徳太子假殿檜皮葺完成	6月18日
一	同 素屋根取除	7月5日
一	同 塗替完成	7月10日
一	同 石階及び石柵完成	8月8日

そうしてこれから後の計畫又は工事進捗の有様は、其幾分を近刊の豫定であるところの、圖を主としたる【四天王寺】の内に記載するものである。

最後に前例により、昭和20年11月以降、同22年3月迄、17ヶ月間に四天王寺へ往復した度

四天王寺の焼失と復興

數及び年月日を左に掲げておく。

昭和20年11月	二回	9日・10日、21日・22日、30日。
同 12月	二回	1日・10日・11日、30日・31日。
昭和21年1月	一回	22日・23日。
同 2月	一回	22日・23日。
同 3月	二回	13日・15日、22日・23日。
同 4月	一回	22日・23日。
同 5月	一回	21日・23日。
同 6月	一回	13日・15日。
同 7月	一回	9日・11日。
同 8月	二回	21日・25日、30日・31日。
同 9月	二回	7日・9日、23日・25日。
同 10月	一回	12日・14日。
同 11月	一回	11日。
同 12月	一回	16日・18日。
昭和22年3月	一回	13日・15日。



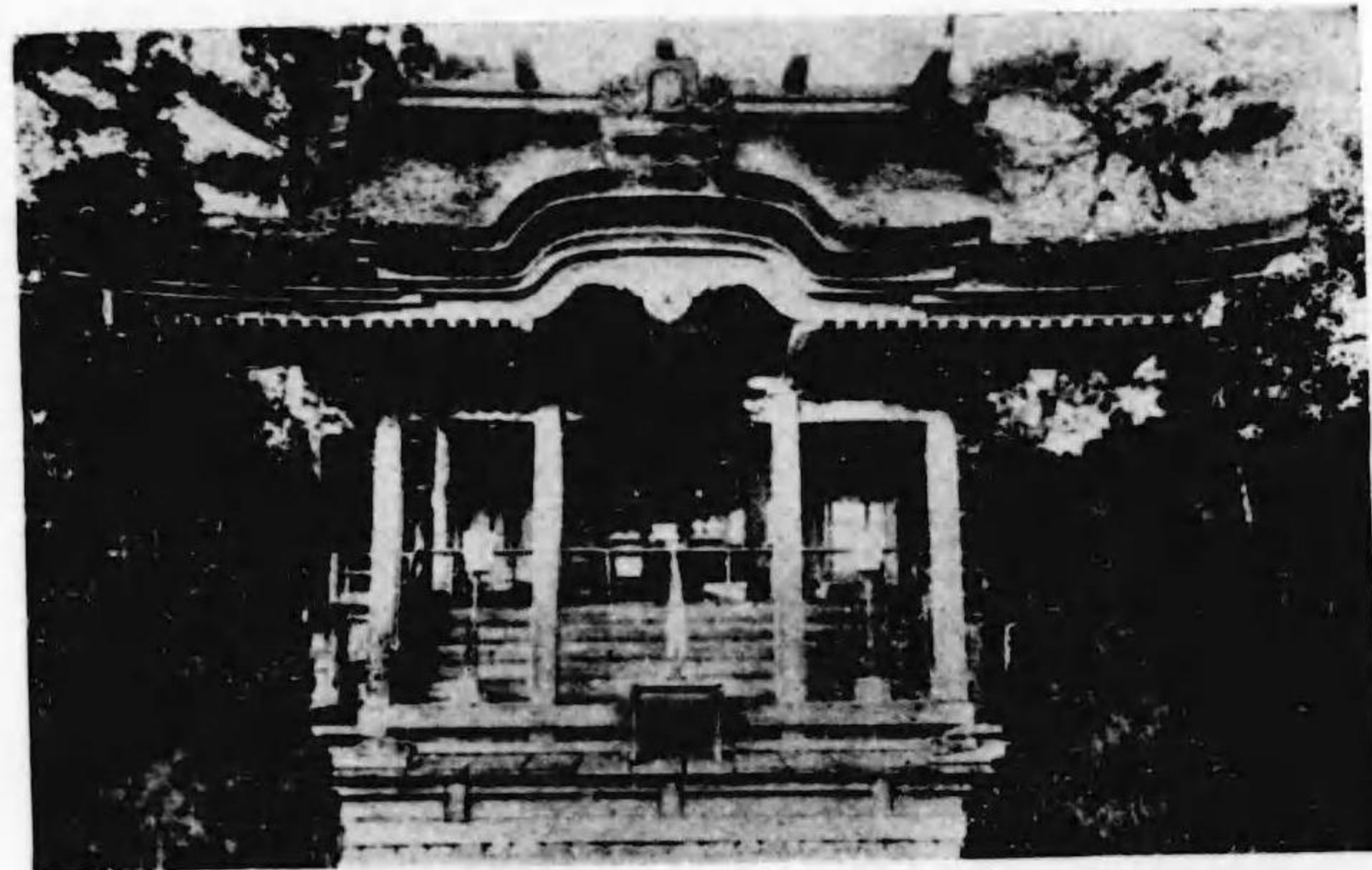
右のうち日歸一回(11月11日、これは先方全部不在につき直に歸宅した)を除き昭和21年3月の豫定を入れて一泊九回に二泊十回、合せて十九回日數にしてともかくも五十日、其割に殆んどこれという結果もなかつた事は、洵に恐縮至極であつた。

(昭和22年3月3日稿了  
昭和22年3月25日増補)



圖  
版





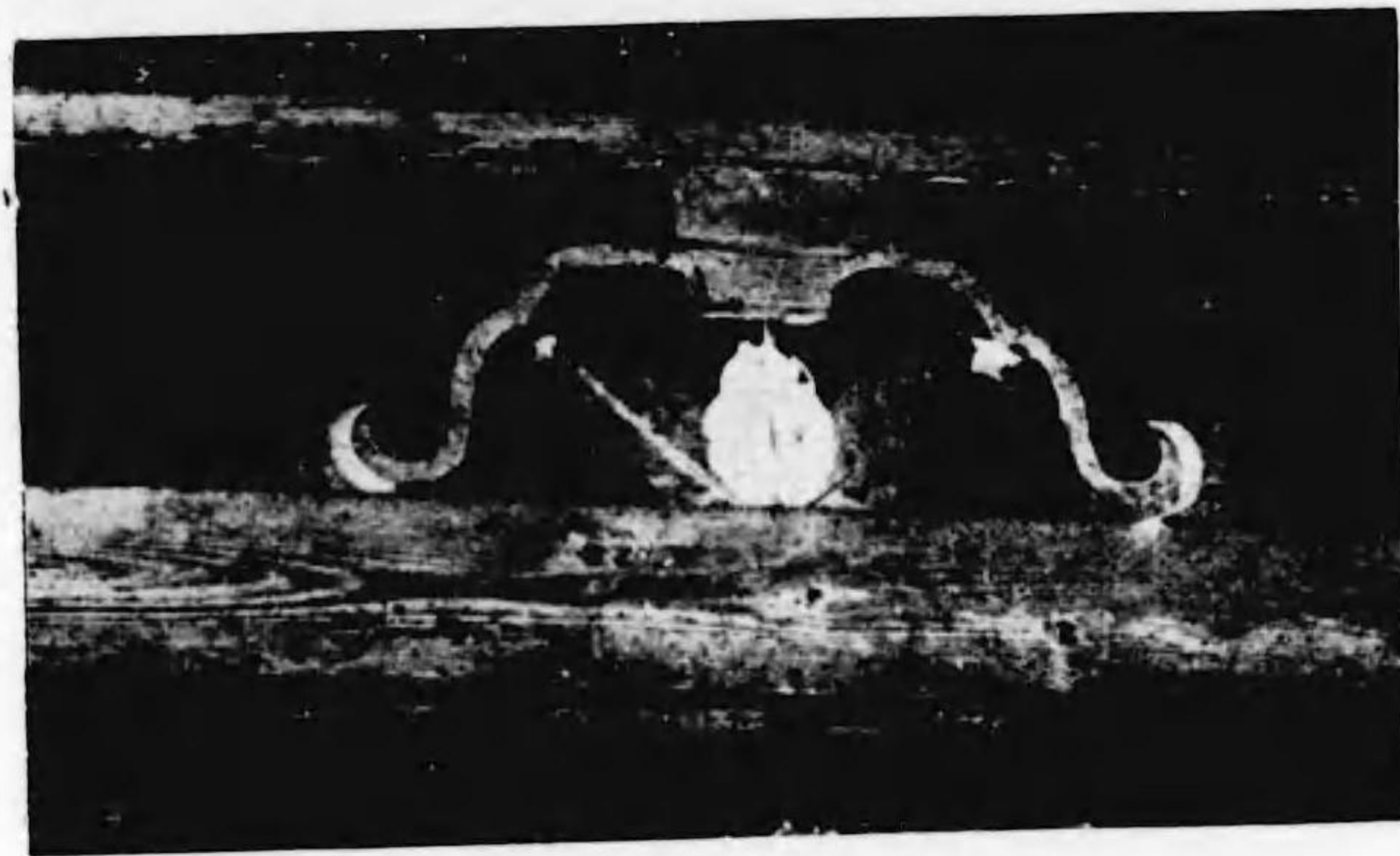
上、四。兵主神社本殿正面（繪葉書複寫）

下、五。同 蕨股（繪葉書複寫）

四は兩方に何とも形容致し難い拙劣なる木製の燈籠を隠すために、色を塗っておいたら、製版所で見かねたのか、胡粉を以て樹木を描いてくれたので、面目を一新しジャングルができた。

五は木葉に毛筆の蕨股。向って左下の縦に平行線を引いたところが後補で、夫が拙いといって修理の時にとって了ってやり直した部分だが、どうもやっぱり申兼ねたが気に入らない。





上、一二の一。穂波神社本殿向拜部分  
 下、一二の二。同 葺段詳細  
 (宮崎龜三郎氏寄贈寫眞複寫)

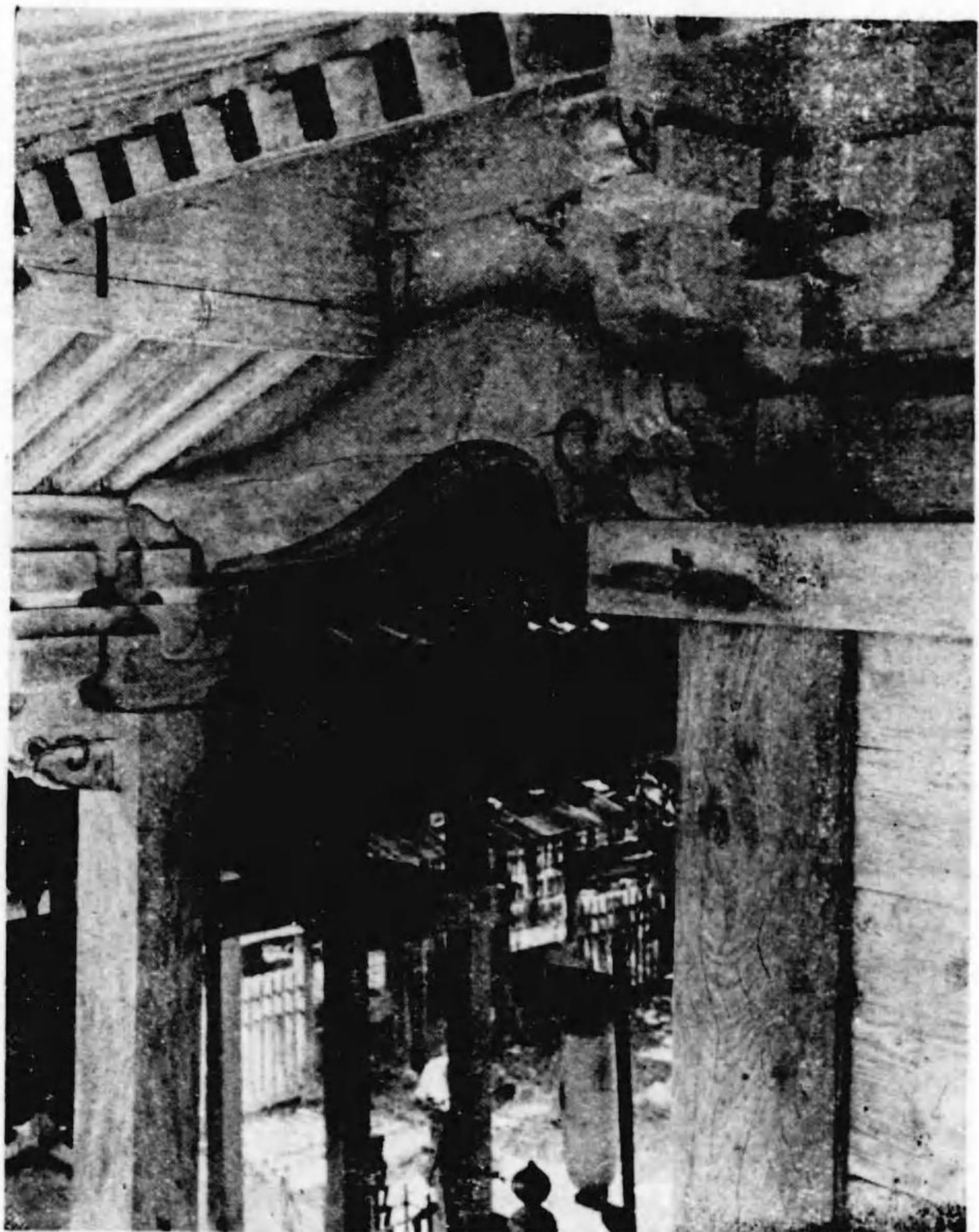
同氏の撮影に係るものと承った。上圖に於いては虹梁の形と木鼻とに注意し、下圖に於いては葺段の輪廓及び脚内の彫刻(木葉三枚)に注目せよ。上圖の木鼻は長大に失するものの如く、柱上の三料と釣合がとれていない。其他脇障子・懸魚等も見落さぬ様にする事。



一〇、白山社社殿鬼板 (竹原吉助氏藏寫眞複寫)

木製で珍しい。角と牙とが抜けて了ったのは惜しいが、夫でも何でも貴重品なるを失わない。木製のは此他に滋賀縣犬上郡東甲良村の西明寺にある。他例を知らないが、あっても極めて珍しい事と思う。高約五寸六分、ハリカラ厚約七分、額面(鼻)高さ約一寸。





二二、白岩丹生神社本殿正面及向拜部分

(竹原吉助氏藏寫眞復寫)

左側面後方から向拜へかけてみたところ。和様・唐様の細部を取交ぜている所に注意せよ(二三参照の事)。



二四、白岩丹生神社本殿正面部分 (竹原吉助氏藏寫眞復寫)。

正面の格子四枚建の上方の細長い欄間は、他の多くの例の如く三つに竹の節を以て區劃し、夫夫異なつた彫刻が入れてある。向つて左から椿(?)・菊・大枇杷という。椿か何か判らないが、素晴らしい花で、可なり込み入つたものと、大枇杷というものは、實は枇杷の種類ではなくて、一名「ヨイチザクラ」ともいうところの、やはり無花果の種類らしく、暖國の海岸に多いそうだ。私は中央の菊に興味をもつたので、葉の缺刻の底が圓形の孔にしてあるのが面白と思つたのである。何れも欄間の板は相當厚く、従つて全體として見ても最早鎌倉系統の薄いところはなく、『次時代急速の進歩の萌芽は充分に認められる。





二五、白岩丹生神社本殿右側面龕股 (竹原吉助氏藏寫眞複製)

昔の龍は額のまん中から一本角が生えていたが、もう此時代になると此寫眞の様に二本になる。併し顎髭は明治時代の貨幣に現れた龍の夫の様に、鋭利な針の様に未だ變化していない。額も遙かに柔和で、なりも小さいせいから、禪寺の法堂あたりの天井の門窗を二枚むき出しであるのより、どの位見いいか判らない。此寫眞はもう少し下の方までである様に指定しておいたのに、製版所がぞんざいで、ほんの僅かだが下の方が切られてしまった。これだけでやりかへさせるのも、餘り勿體ないから、がまんしておいた。



二六、白岩丹生神社本殿左側面龕股 (竹原吉助氏藏寫眞複製)

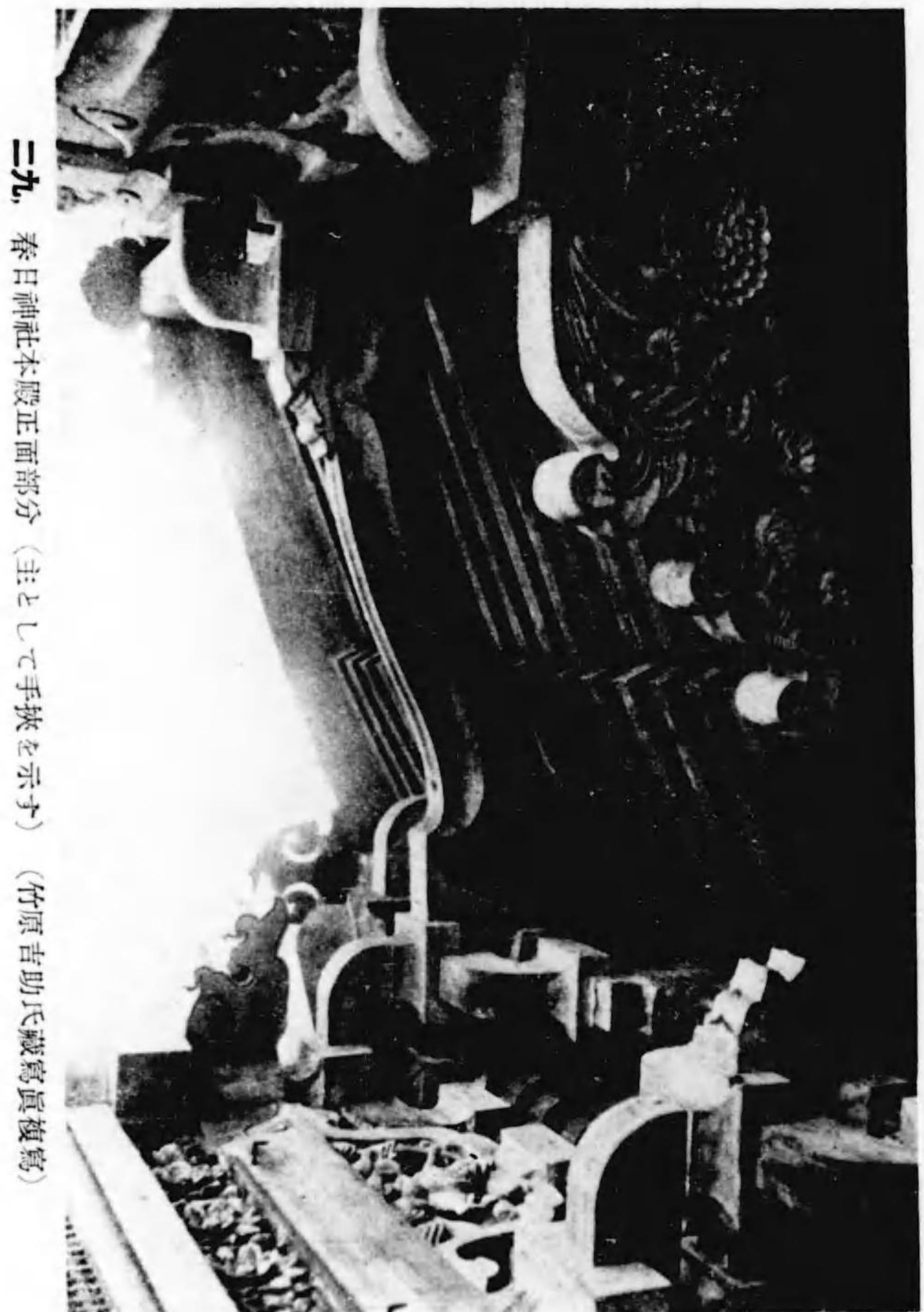
鎌倉時代以降の牡丹龕股としては、優秀な點に於いては恐らく第一流といえるだらう。本文にも書いた通り、花や蕾の配置が型に嵌らず、巧に左右相稱の公式を破り、左方の正面向き半開の花と右上すみの蕾と空間を填めてゐる便化葉とで、平均を取つてゐる。而も此牡丹唐草の骨線は鎌倉系統である事を十分によく現わしてゐる。比較的新しい龕股としては、これ位のときはそう多くは見出さない。



二三。白岩丹生神社本殿背面部分

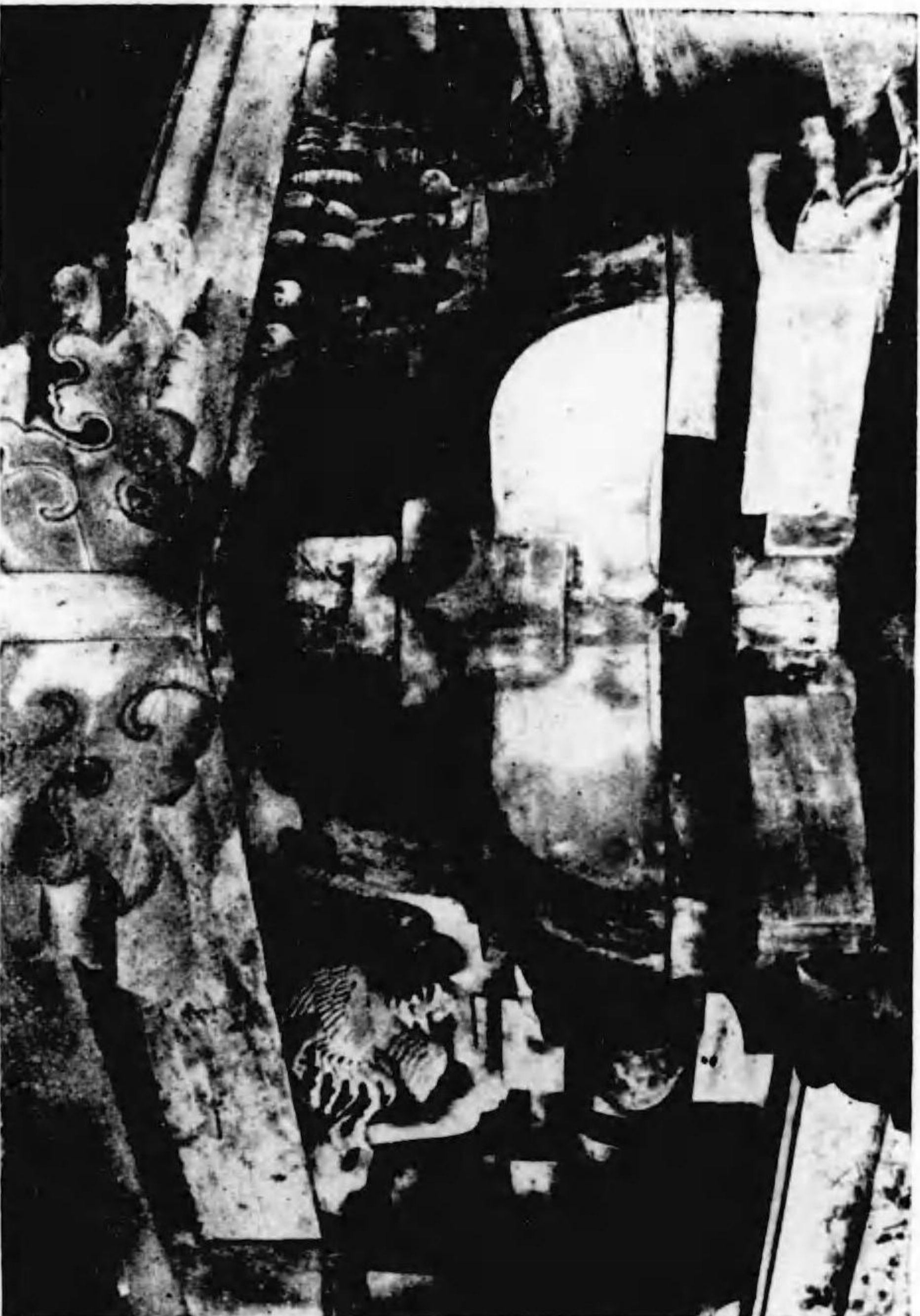


(竹原吉助氏藏寫真複寫)



二九。春日神社本殿正面部分 (主として手狹を示す) (竹原吉助氏藏寫真複寫)



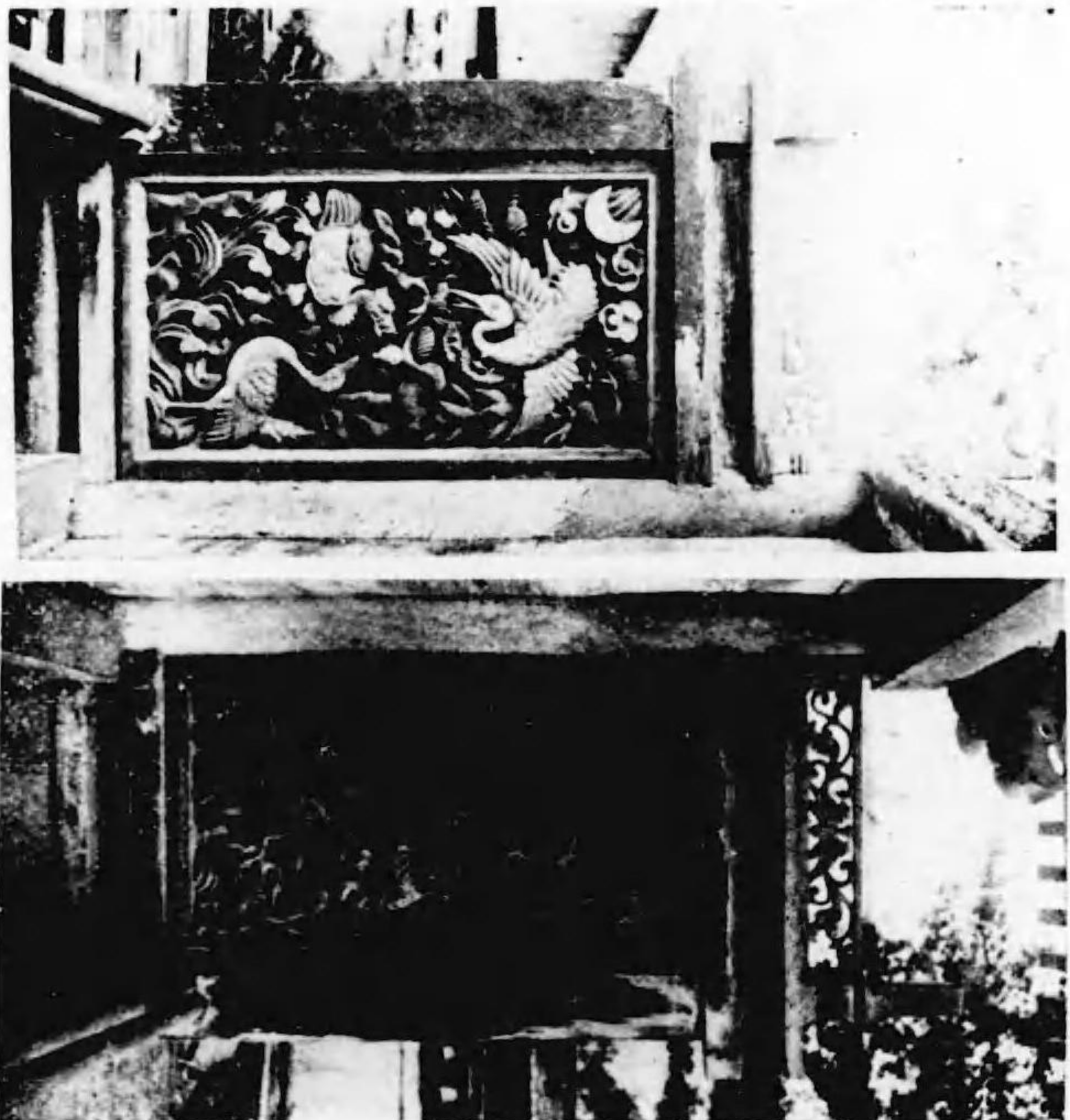


三〇。春日神社本殿正面左隅を隅より見る。

(竹原吉助氏蔵寫眞複製)

右、三〇の一。春日神社本殿左脇障子  
左、三〇の二。同  
右脇障子  
(竹原吉助氏蔵寫眞複製)

脇障子としては、何れも笠木が二重にあるのと、竹の節の上の、普通ならのびで桁を支えている木が、無意味に途中で切れているのが注目に値する。上の欄間は割合に原始的のところがある。人物は黄石公に張良ださうだが、此時分にこんな人物があつても差支はない。日・月・雲・水・松・竹・橘・龍等甚だ混雑してゐる。

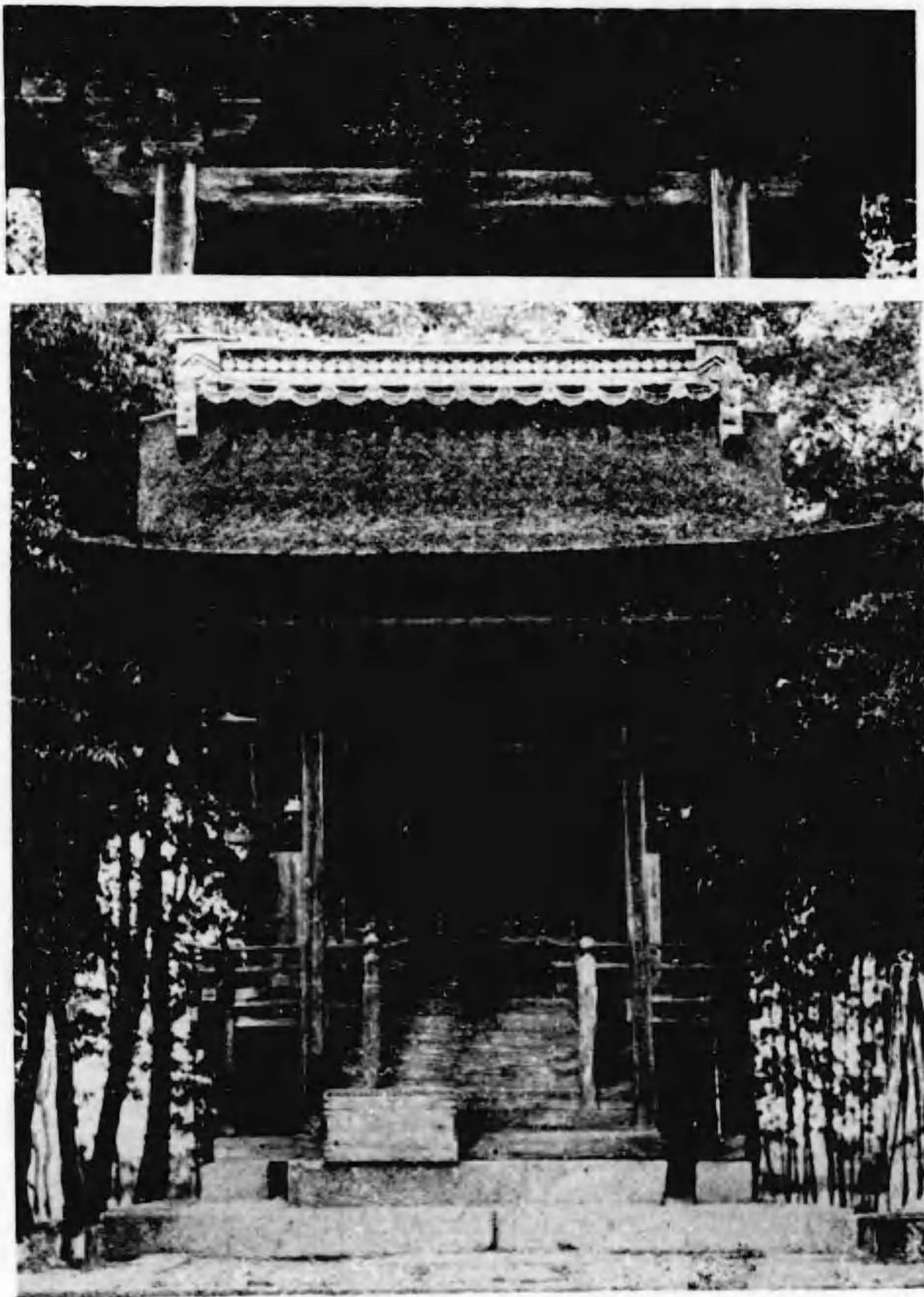






三二、春日神社本殿右側面葺段の一 (竹原吉助氏藏寫眞複製)

浪に蝦を刻したもので、私は珍らしいと思う。こんなのは山國の建築には餘りない筈である。作し具類を入れたり、海膽を入れたりしたのは除外例で、一例をいえば前者は高野山に、後者は長野縣にある。蝦の例は粉河に近い風市神社と、この春日神社の二つを知っているだけである。これは「伊勢海老」である事は一見明らかで、この彫刻師はよく其特徴を丹念に寫生している。蝦類は、人間でいえば額のまん中から長い角の様なものが前方に出ている。これを「額角」というが、「イセエビ」の科のは額角なく、鋭利な棘が二本生えている。夫から歩脚は五對あり、此等の歩脚に完全なはさみがない。其上に第一觸角の先が長く二つに割れている等で、全部此等がよく現わしてある。第一・第二觸角を輪郭上に映み出さしたのは巧みな手法である。



下、三三。志那神社本殿正面 (家藏寫眞複製)  
上、三四。同 部分 (家藏寫眞複製)





三五。志那神社藏棟木斷片

(家藏寫眞複寫)

多分下へおろして積んでおいた間に、白蟻の喰害にあつたのだらうが、上から二番目の字が全部消えてしまった。其他變な字もあるが、ともかくも

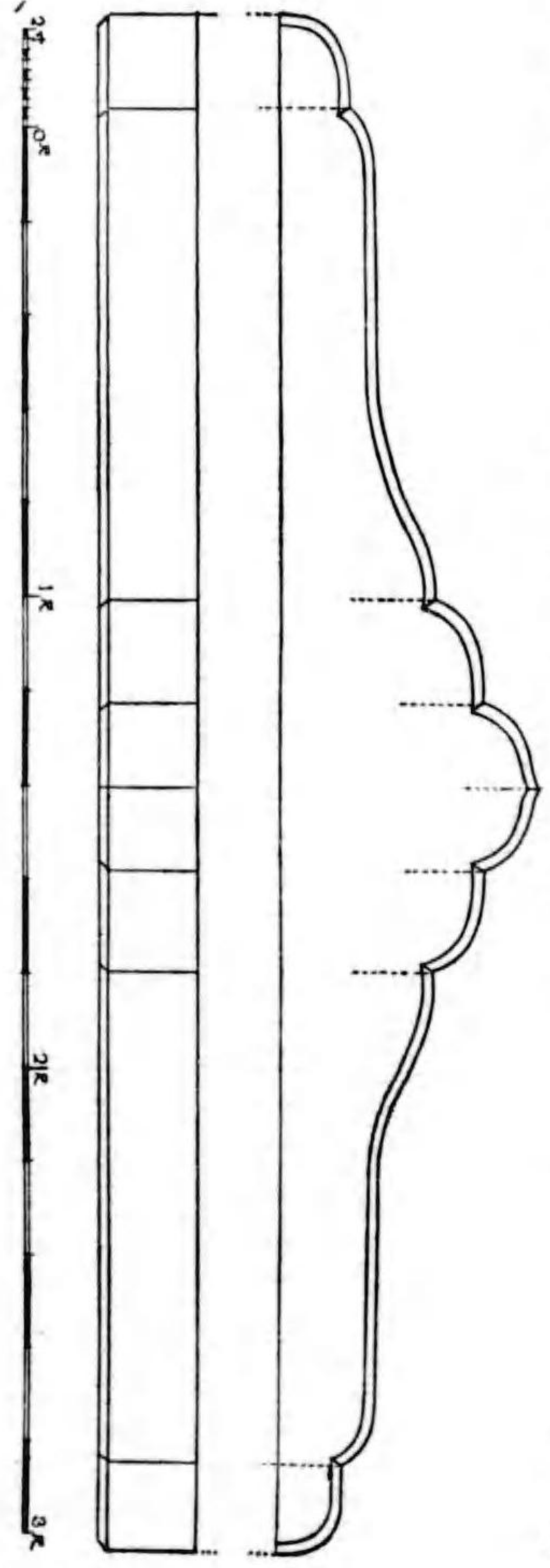
永□六年戊七月五日棟上日也 同二日 手斧始也

大工藤井宗正

と讀める。或は「永」の次は東でも立ててあつたので、そこだけ喰われたか、右下の一點だけであとは何も無い。併し「永」が上につき、其元號が六年以上つづき、さうして其六年目が「ツチノエイヌ」に當るのは永久六年と永仁六年の二つだけ。ところが永久六年の方は、あらゆる點において都合がよくない。そこで永仁の方をとつてみると、本文にも記した通り、まことに工合がいい。のみならず、墨書の右下に残っている黒點は「仁」字のつくりの「二」の右下の残りと思われる。旁これは「永仁六年」として差支はなからう。

尙お序ながら、大工藤井宗正の「正」の字は、此時代は殆んどいつも「𠄎」を用い、今の様に、「正」は先ずめつたに使わなかつた様である。「斧」という字も大分變つてゐる。

三六。滋賀縣栗太郡常盤村大字志那 村神社那神社本殿釘戸木 昭和二十一年十月、日製圖



此木片は長さ三尺二寸餘り、下から見上げたところは、花瓶型の曲線又は格致間上部の様な曲線を有し、向拜柱間に軒桁と下端揃いに、前方へ水平に取つけてあり、これから鈴が下げてある。普通向拜柱材拱間を裝飾すべき葦段はない。鈴を吊り、其鈴を鳴らす爲の紐を下げては、折角美しい葦段を入れても、大部分は隠されて了ふからやめたのであらう。とにかく珍稀な手法で、ついこれまで他で見た事はない。形も非常によろしく材料も他と比べて新しい様にも見えるから、恐らく後世修補に當り、古いものに倣つて造りかへたものらしく、其時面幅も狭くしたものと考えられる。面幅厚さの十分の一。





瀬淵八幡神社本殿向拜木鼻 (昭和二十一年三月二十六日・竹原吉助氏)



瀬淵八幡神社外陣木鼻 (昭和二十一年三月二十六日・竹原吉助氏)





〇寸

九寸

鞆淵八幡神社本殿西妻大瓶東上繪塙肘木

(昭和二十一年四月八日・竹原吉助氏)

初め此等二枚の寫眞を折込みにして一枚に製版する様に計かくして居たところ、都合により二枚にしたのでこの様になつて了つたが、とにかく**三七一四〇**の六種を比べてみると、卷貝の様に渦になつてゐる葉と、葉研なりに刻した葉とが非常に目立つてゐることが共通である。六種何れも同じ様で少しづつ異なり、頗る達者に刻してあるから、(次頁へ)



〇寸

九寸

鞆淵八幡神社本殿東妻大瓶東上繪塙肘木

(昭和二十一年四月八日・竹原吉助氏)

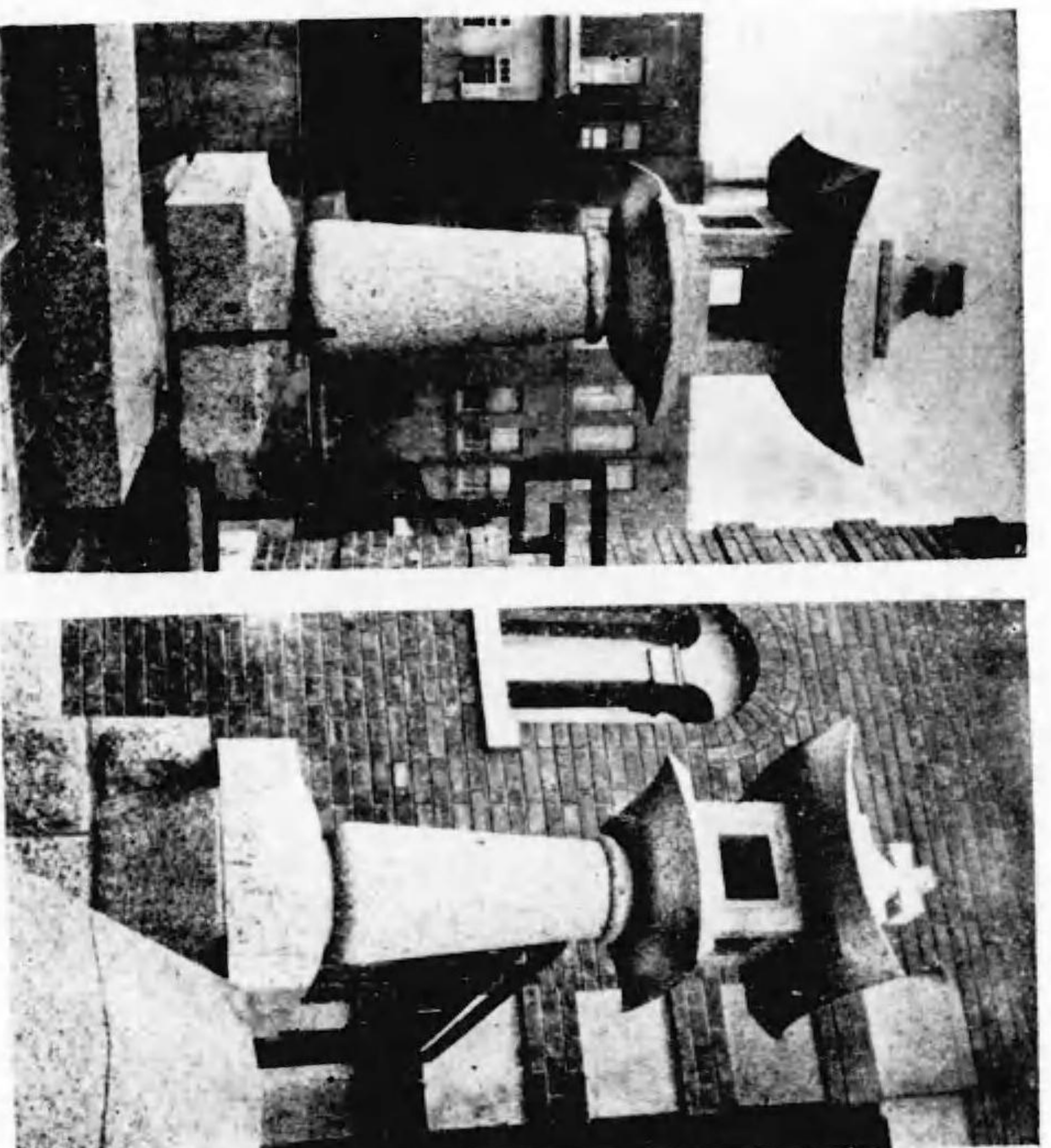
(前頁より) 餘程腕がきいていないと、恐らく此等のように自由自在には刻めないであらう。勝手な想像だが、下描きも何もせずに、いきなりぶつつけにやり出して、夫を巧にまよめたものと考えらる。而も何れもよく室町時代を現わしてゐる。此等は同じ渦文化した葉を二枚乃至三枚つけて少しもうるさい感じのしない點は洵に敬服に耐えない。





朝鮮八幡神社本殿手挾 (昭和二十一年四月八日・竹原吉助氏)

向って右は東側の分東面、左は西側の分西面、何れも未だ嘗て見た事のない意匠、ともかくも其面は各渦文三つと木葉にて充填されていて、少しもうるましくなく纏めてある。



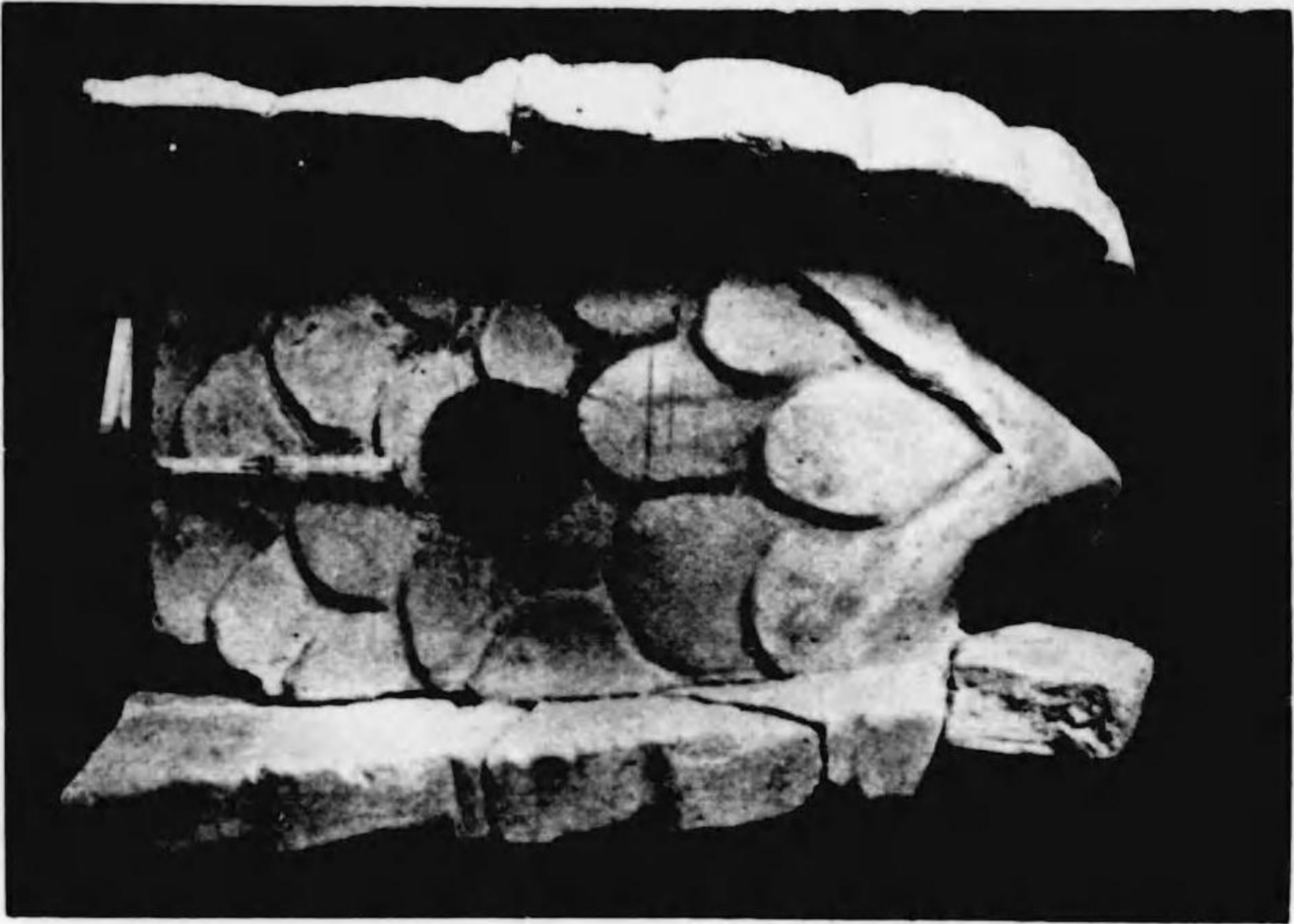
右、四一〇の一。朝鮮平北新義州邑内天主教會堂石燈 其一  
左、四一〇の二。同 其二

(物差は曲尺の一尺・兩圖共昭和十四年十一月十九日)  
右は正面からの寫眞であるが、前方に餘地なく、従つておそろしく見上になり、後方へ倒れやしないかと思われれる程でございました。寶珠に當る所を十字形にしたのはいいが、側面からみた時でもやはり十字形になる様にした方が一層よかつたらう。





右、四二。慶州博物館藏鳩尾 共一 (昭和十五年十二月十七日)  
 左、四三。同 共二 (昭和十五年十二月十七日)  
 (右物差、曲尺の約五寸(六吋)・左曲尺の一尺)



四天王寺に關する

圖 版 解 說



圖 説 解 説

四ノ上巻 一頁

昭和21年6月14日朝は透き通る様に晴れていたから、早起して境内一巡、元回廊内西北方に焼けて枯れて残れる大楠を前景に、塔址を遠望したところを寫してみた。朝割合に早かったので、境内を歩いている人もなく、一種の風景寫眞ができた。此大楠は生前も随分立派であつたが、焼けてからも枝振りは甚だ面白く大に風致を添えている。而も根元から第二世が立派に芽を出したから、將來は定めて第一世の壘を摩するであろう。寺の一部では此幹を輪切りにして、記念に圓卓又は火鉢にでもしたらという説もある様だが、夫には立派すぎて惜しい様な氣がする。

四四。大寫しの枯木は大楠。右下根元のは新しき芽生、畫面の中央は塔址の遠望、其前景は金堂の址。

塔址の左金堂址の背景は南鐘樓、其左方に見ゆる棒は金堂址中央の標木。

四五—四八。此等四枚は圖版の下に記した簡単な解説で十分な筈である。

四九。塔址東南隅からの寫眞で、昭和21年秋彼岸の中日、朝早く、六・三〇頃の寫眞。ともかくも塔の大部分はでき上り、未だ龜裂が左程大きくならないから、危険という程にはなっていない。四方の四天王種子を刻した石のうち、東方の分がはっきり見えている。

五〇。基壇の上へのり、同じ方向から寫してみた。種子石中右は東方ので左は南方のもの。塔身にそ



いて立てる人物に比較して、塔の大きさが大概推定できるだろう。

「平頭」は立方體で塔身は球面なのに、其接續のところを誰にも判明しないと見え、塔身の上に平たく板を置き、其上に平頭の立方體を積み上げてあつた。金剛組では平頭も圓形だと思つていたらしいし、寺側では全然そんな事には無關心であつたらしい。私の原圖は頗る貧弱ではあるが、その邊もはつきり描き、寺へ提出し、寺から金剛組へ渡したのに、一人も注意しなかつたと見えた。本文のうちにも記した通り、塔身に龜裂を生じたから、積み直す必要があり、どうせ壊して了うのだから同じ事だが、こんな簡単な圖が一人も了解できないとは、何ほ何でもひど過ぎる。

平頭の上の詩花は、とても瓦では積めないから、初めから木材で造らしてみた。金剛組の細工小屋の一隅で、小林という老大工が一人で造つていたが、割合に呑み込みがよく、器用な性質と見えてよく出来ていた。

五一。此神社建築は江戸初期らしく、これもまた割合によくできている。併し何分古いものゝ上に、まるですてゝおいたので、どこもこゝも可なりぼろ／＼になつてゐるから、手をつけだしたらきりがない。だから成るべくそつととしておく方針を取り、移轉修理をする事に決した。其ためそつくり其儘元三堂の附近から屋根瓦だけ下ろして、下へころをかつて、引張つて来て、屋根だけは檜皮葺瓦棟とし、前の方へ濱椽をつけ、軸部其他木部は朱と胡粉とで美しく塗つた。例えば藁股にしても、輪郭は朱で、脚内の彫刻は胡粉、軒附の蛇腹は朱、といった調子だから、異つた色といつたら屋根の檜皮だけ

けで、全體としては割合に——新しいうちだけだろうが——結果はよろしい。

元本殿の敷地は周圍を斜面として勾配を附し、正面には石階を設け、敷地の斜面上角に沿いて、元圓池の傍に廢物としておいてあつた石柵——此石柵は洵に拙いものだが全く臨時に使用するのだからとの理由で——を利用して、とにかく間に合はし、形だけは整つた。とにかく相當に形も見られる流造の神社建築が太子殿として出来上つたのであつた。

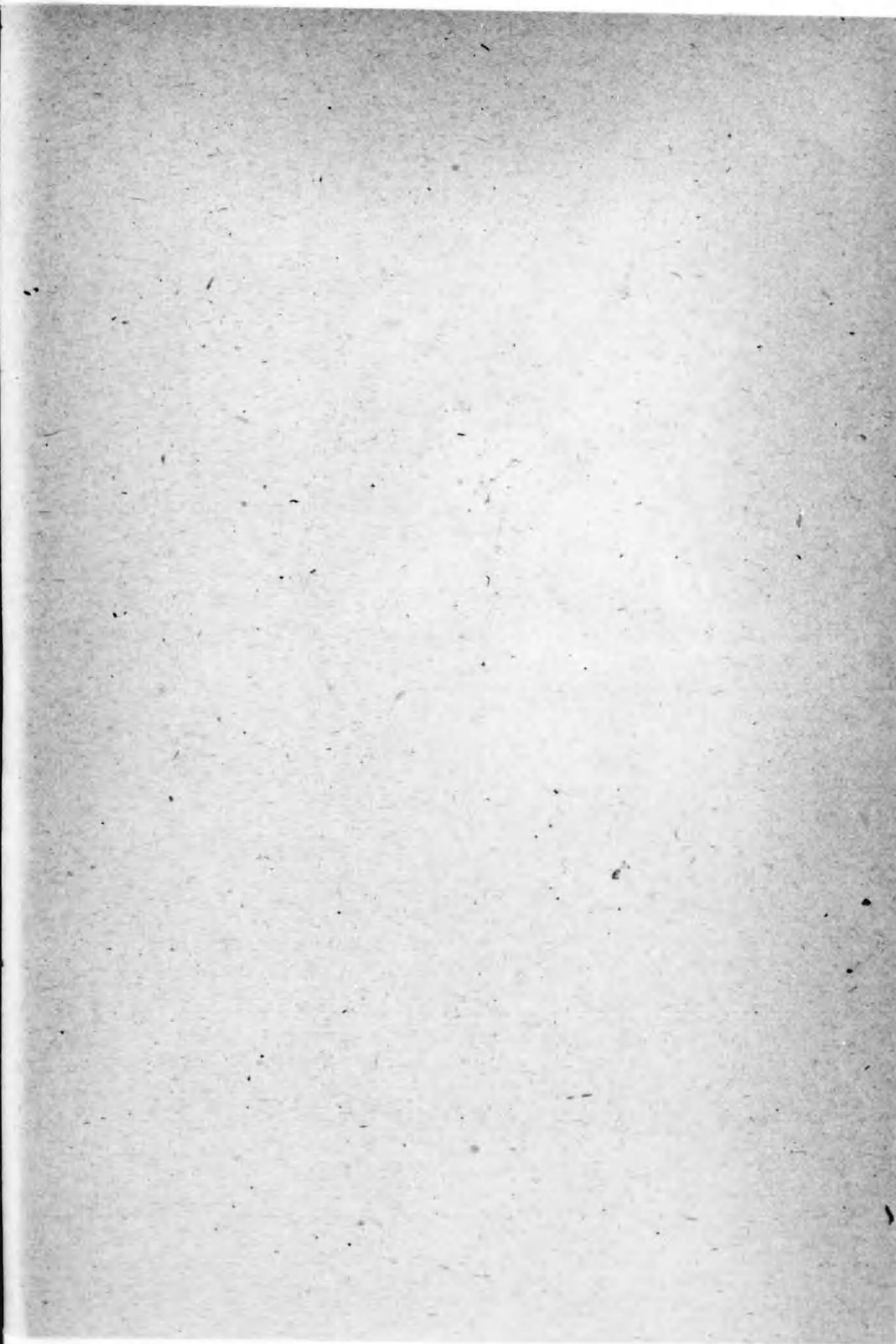
(昭和22年3月3日記)



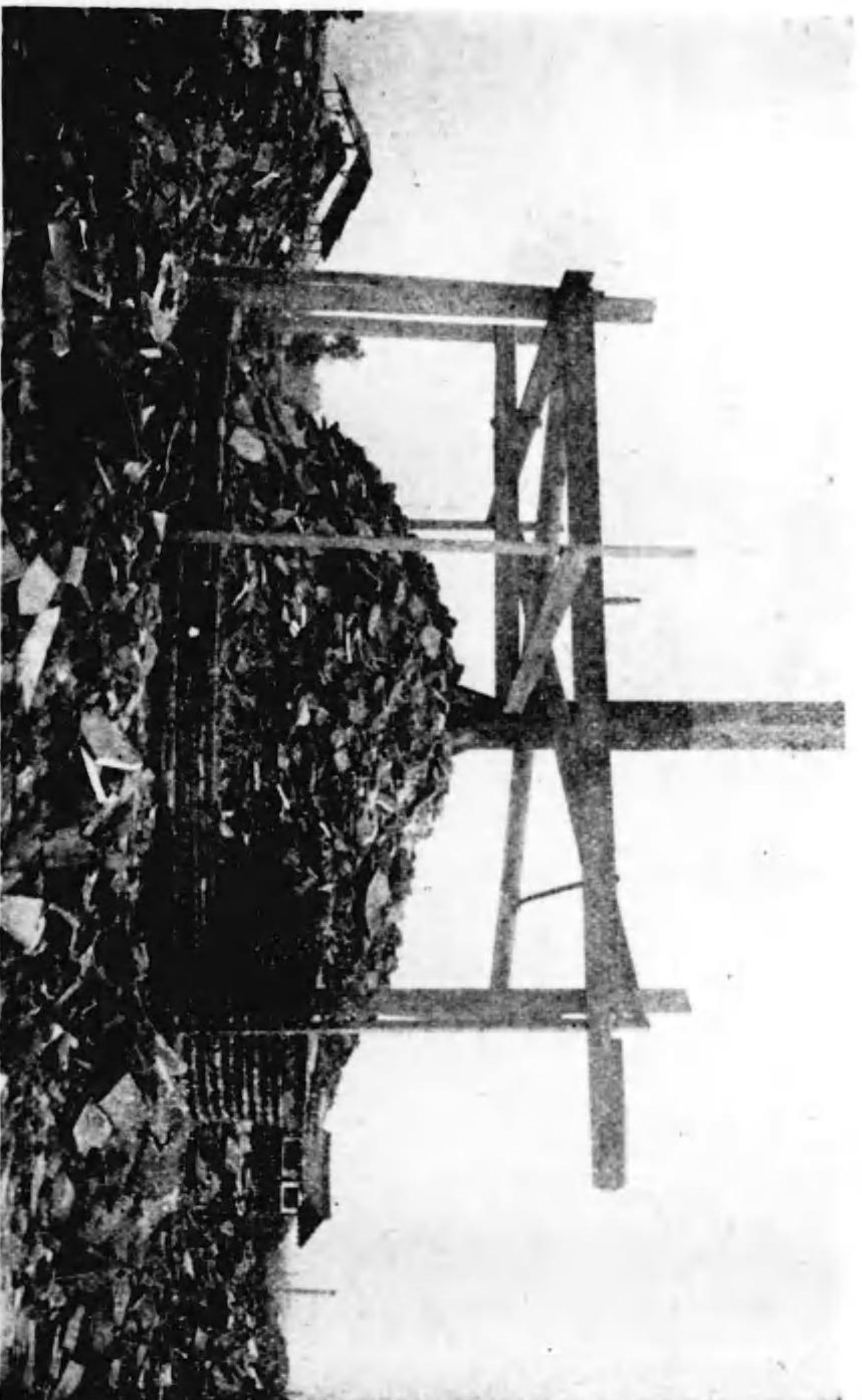


四四。塔址を北微西より見る。

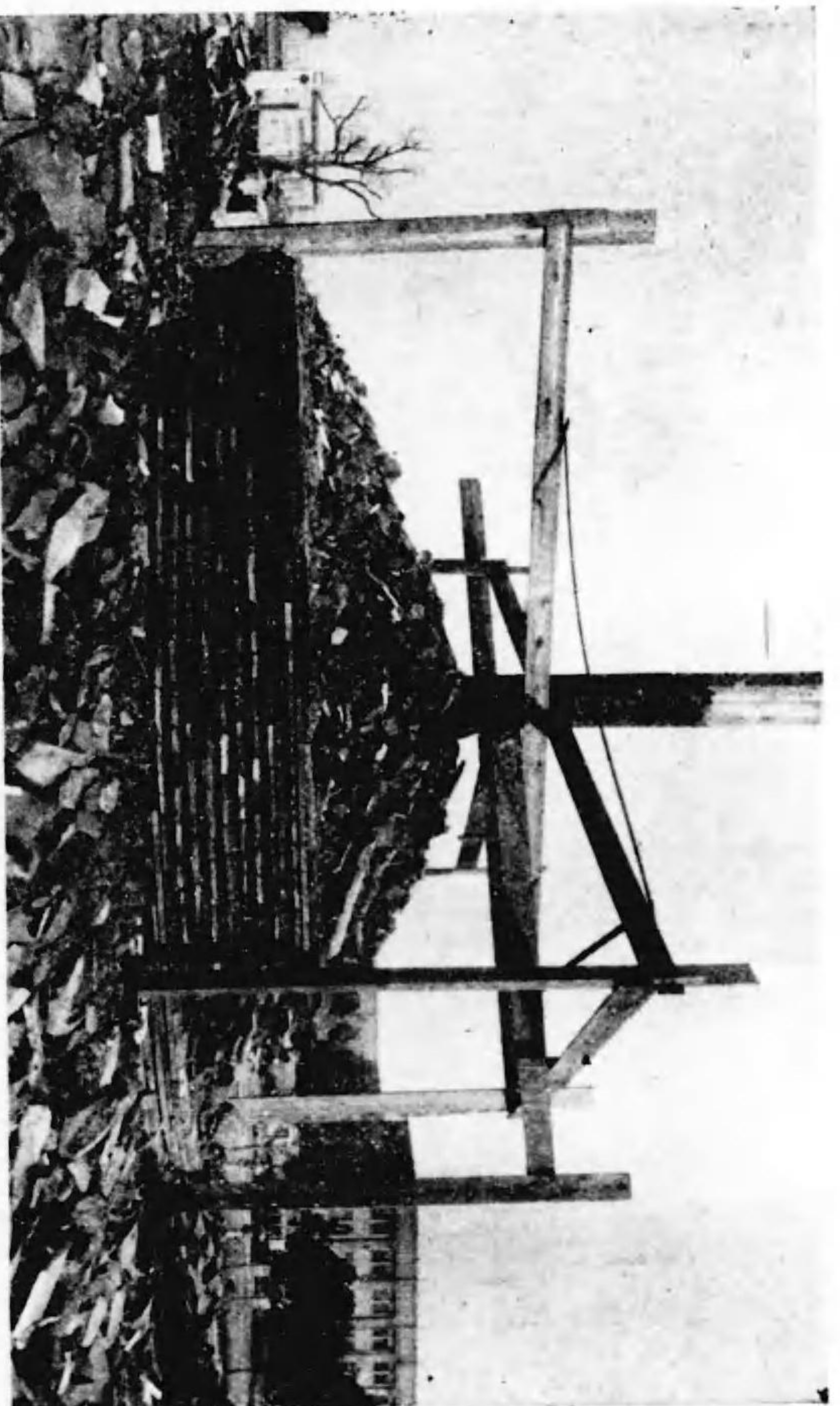
(昭和二十一年六月十四日六時五十八分)





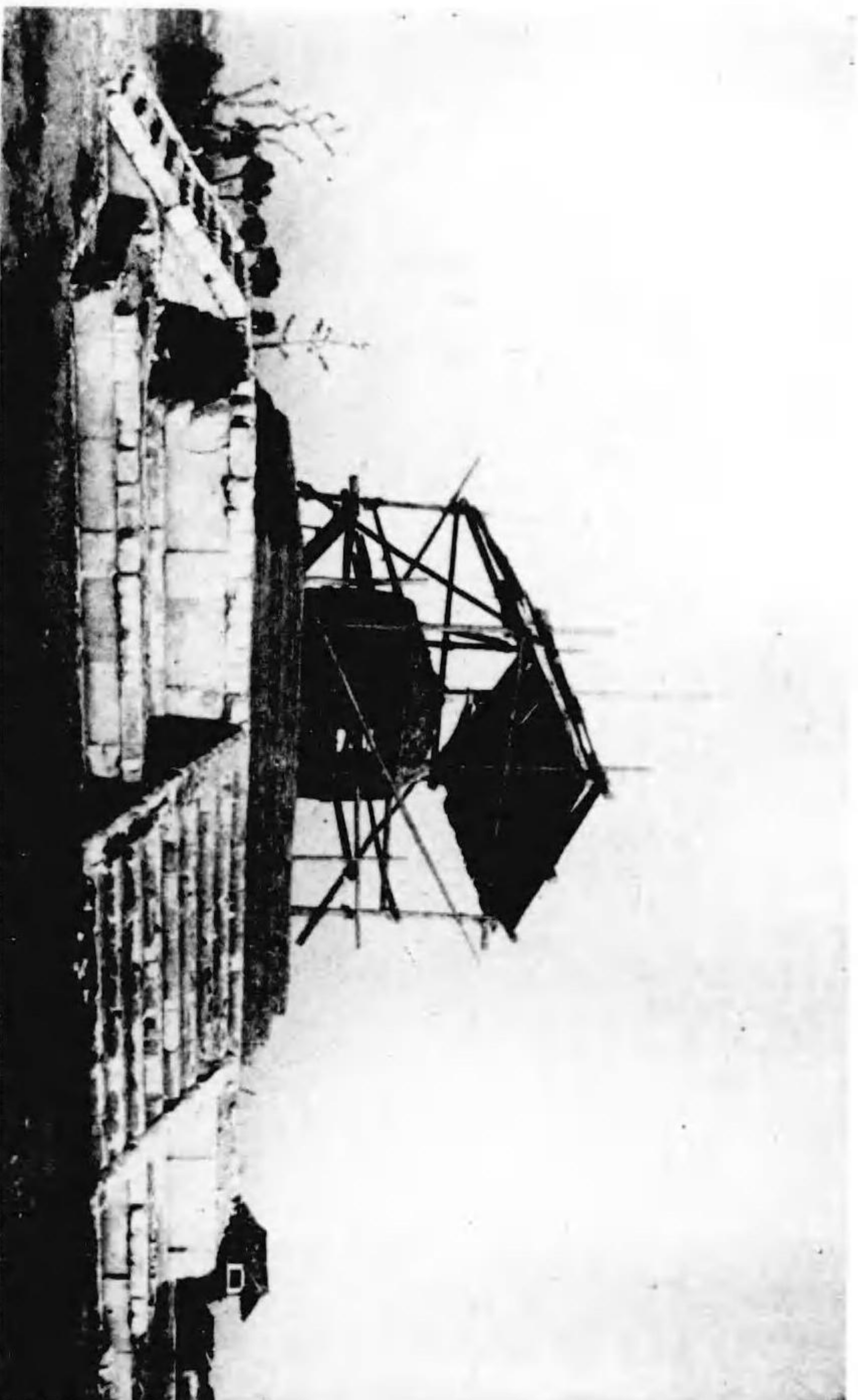


四五、建設中の塔塔 其一 (昭和二十一年五月二十一日)  
此圖は基壇上西北隅からみたところで、右方背景は南齋樓、左方背景は假太子殿(次頁へ)



四六、建設中の塔塔 其二 (昭和二十一年五月二十二日朝)  
(前頁より)と其素屋根 五ニ参照)。四六は前圖の反對側、即基壇上東南隅からの寫眞で、向って右方の遠景は天王寺高等女學校、左方左端は百萬金力の記念塔。枯木の後方は鳥居。





四七、建設中の塔塔 其三 (昭和二十一年九月七日朝)  
此は四五と同方向から見た全景で、南鐘樓は同様に右方遠景に見えている。實(次頁へ)

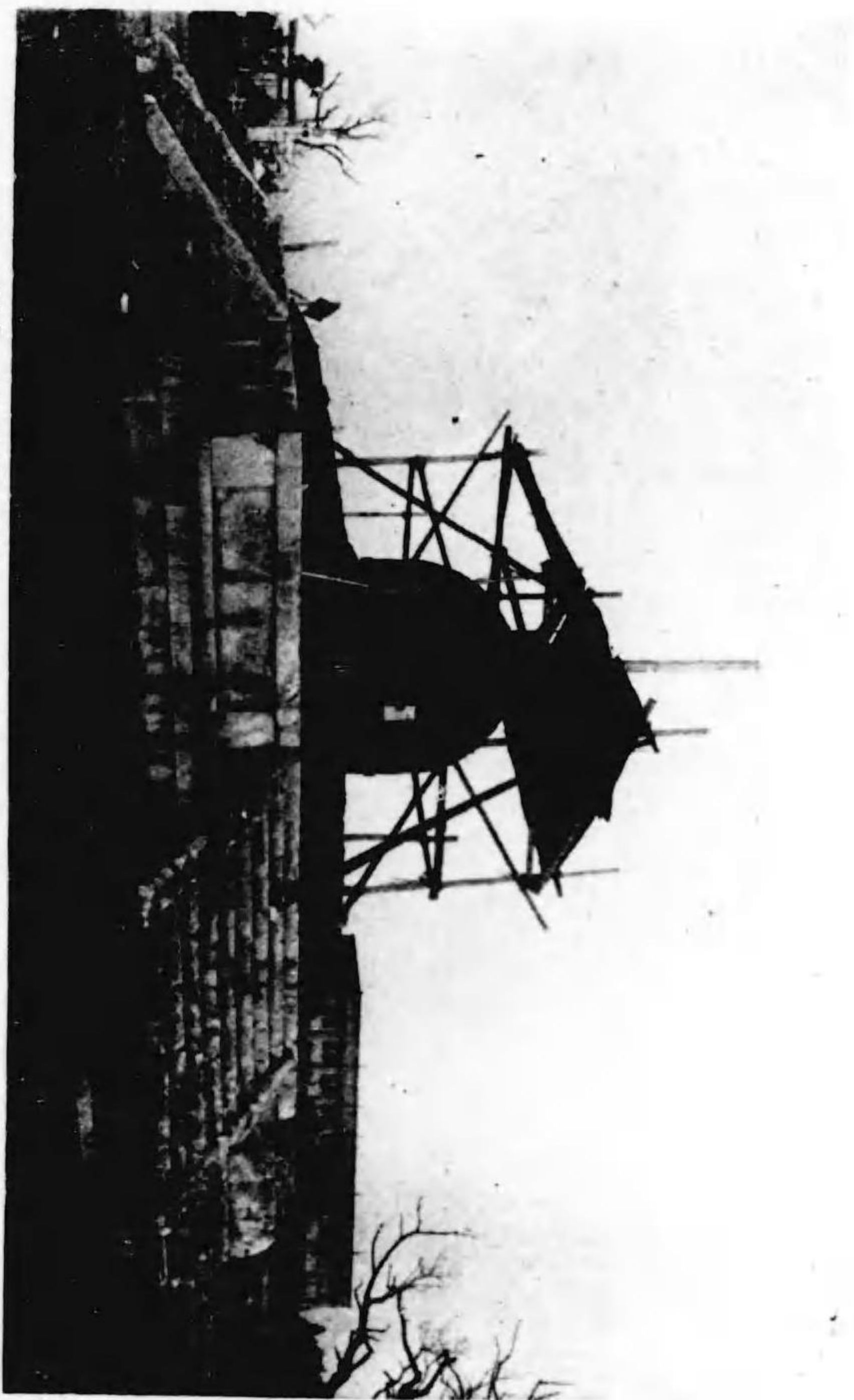


四八、建設中の塔塔 其四 (昭和二十一年九月八日朝)  
(前頁より)は一度このあたり迄積んだ時、豪雨のため龜裂を生じ崩壊したので、改めて素屋根を架けて積み直したのだそう。四八の左側に圓形に塔身に添えるは定規。畫面の右端は枯楠。



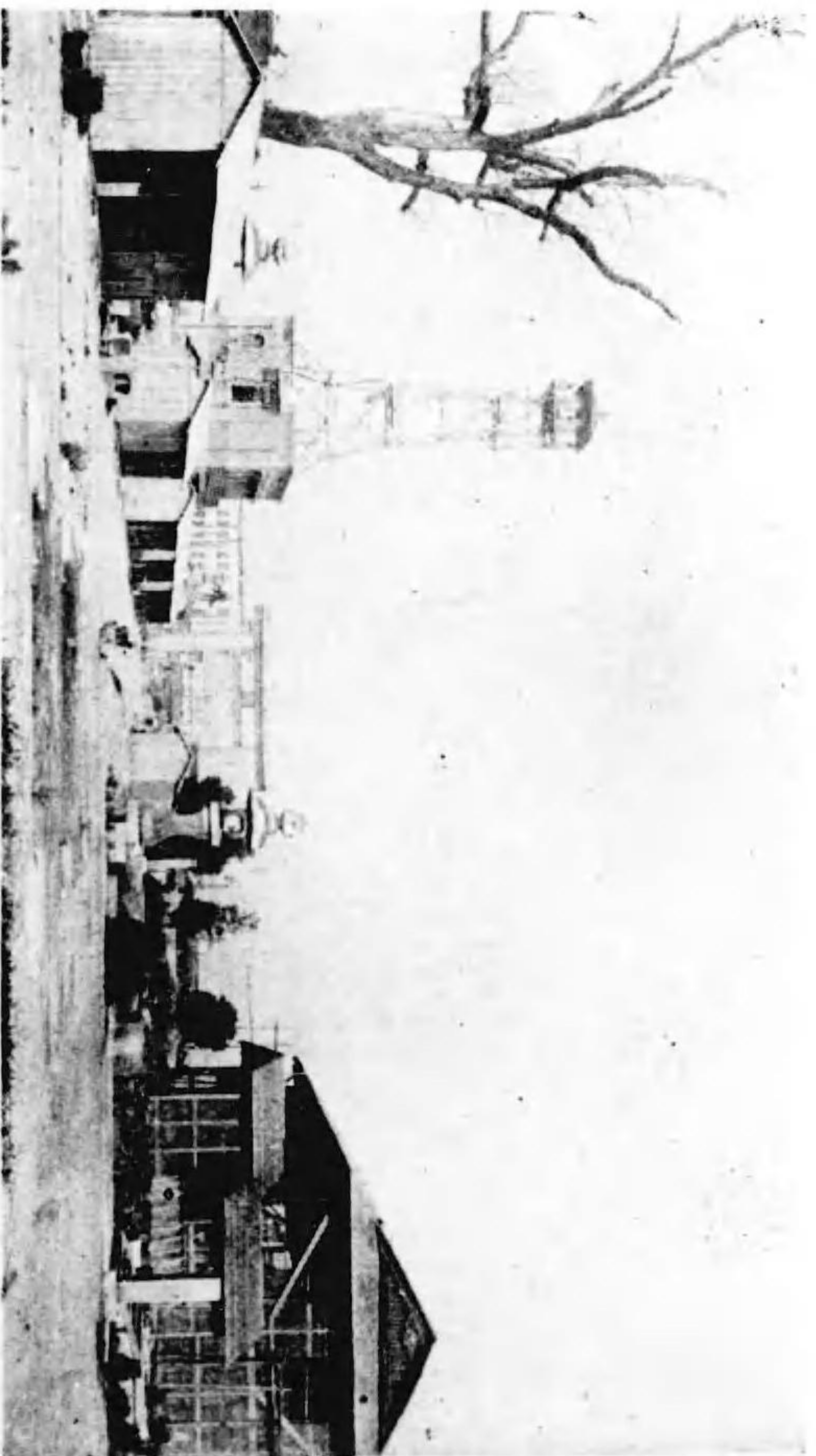


五〇, 建設中の塙塔 其六 (昭和二十一年九月時正日六時五十四分)

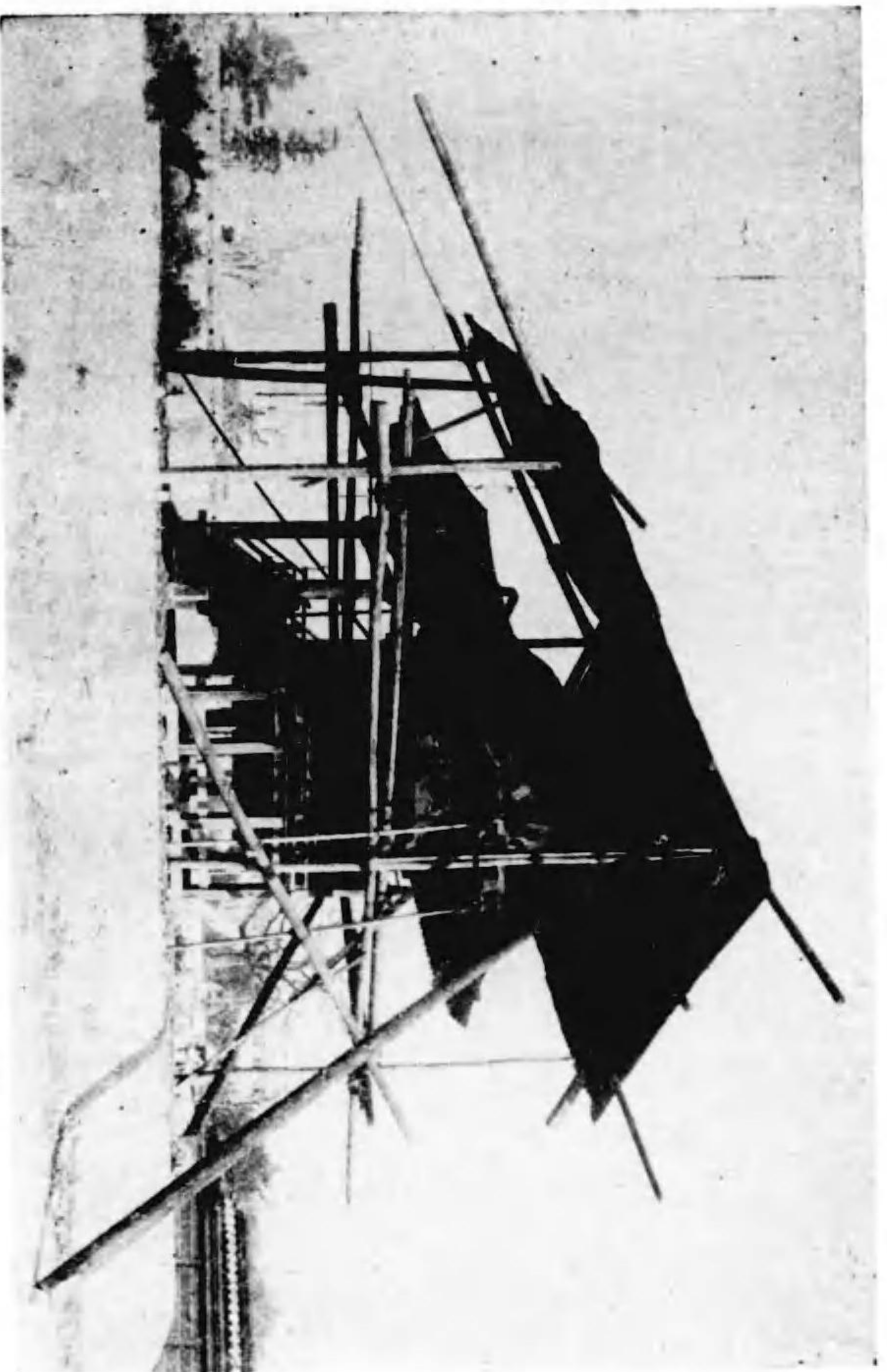


四九, 建設中の塙塔 其五 (昭和二十一年九月時正日朝)  
 秋の彼岸の中日に、どの邊迄出来たかを震すため、幸に好晴であつたので、  
 方向は四六・四八と同斷。伏鉢の上に四角な平頭がのるのが、人夫にのみ込めず、次圖でみる様に  
 隅が浮いてゐる。何れにしてもやり直さなければならぬ有様。





五一、四天王寺西門附近（昭和二十一年六月十四日七時二十二分）  
 圖の中央に見えてゐる鳥居は鎌倉時代に屬する國寶である。左方の切妻造の粗末なる六棟の建築は臨時に寺で建てた賣店で、正面四間奥行一間、つまり四坪のこけら葺き、右方に二棟あり合せて八棟。右端建築中の入母屋造二階建は臨時の納骨堂。



五二、假太子殿 移建中（昭和二十年六月十四日七時二十八分）  
 燒失を免れた元三堂傍にあつた神社建築を移して假太子堂にあてたもの。東方より見る。



昭和二十二年十一月廿五日印刷  
昭和二十二年十二月一日發行

續々成虫樓隨筆  
定價 百參拾圓

著者

天 沼 俊 一

發行者

京都市左京區岡崎北御所町二〇  
谷 口 武 彦

印刷所

京都市下京區西洞院七條下ル  
内外印刷株式會社  
代表者 富 森 茂 彭

發行所

京都市左京區岡崎北御所町二〇  
明 窗 書 房  
電話上③三九五八  
會員番號二一三二〇一

本 製 見 淺

本社ハ奥付定價ヲ變更スルコトハアリマセシ  
落丁、亂丁等不完全ノ品ハ御取換致シマス







終

